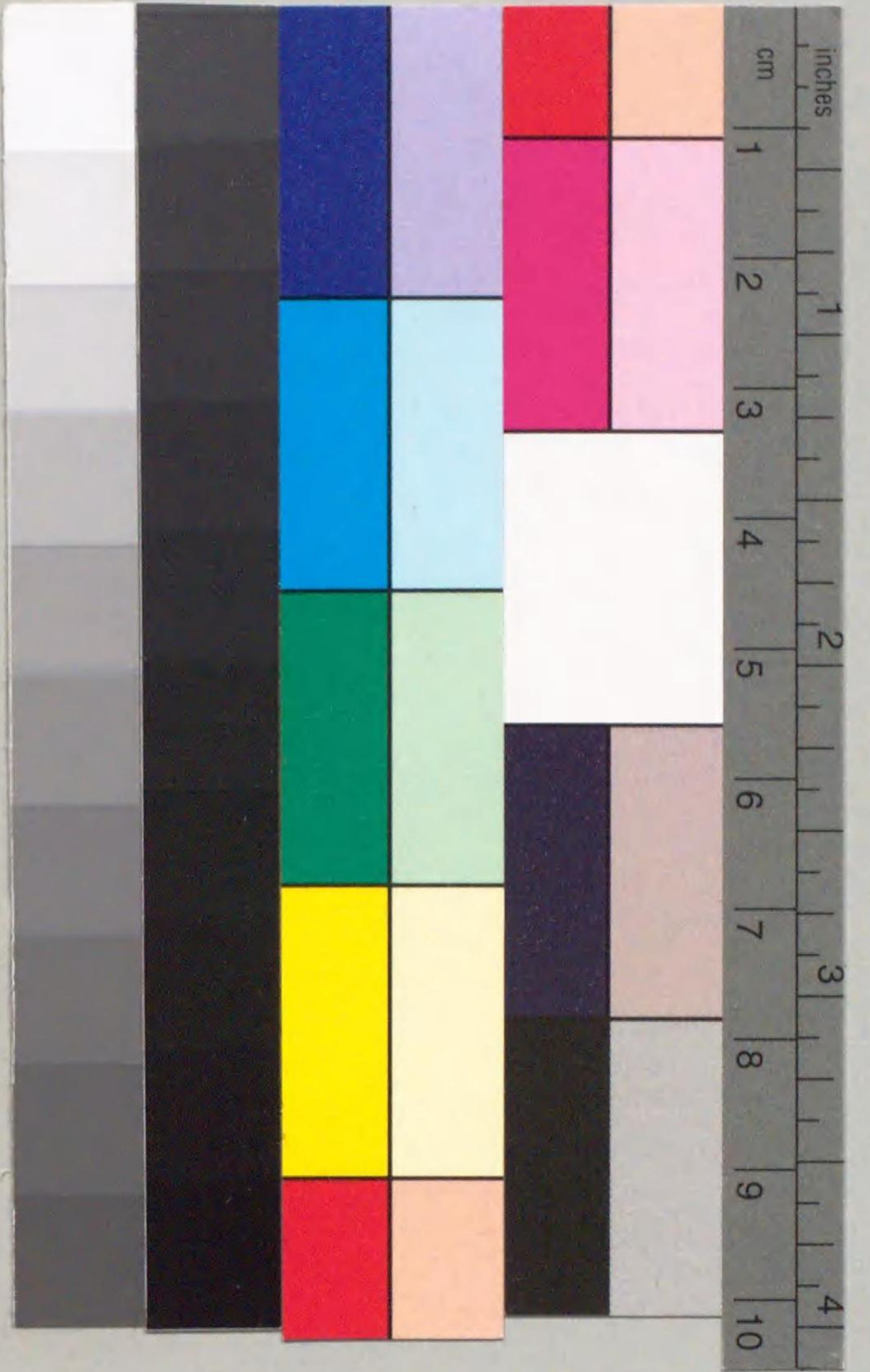


教育勅語
お伽新

恭

黄金の冠
こがね
かんむり





どだ様^様王^様が己^らかれこ



I 種

W



1200701516906



黄金の冠

(一)

福田琴月作
富田秋香畫

この山奥に、一頭の象の象
の王様が居りました。象とい

ふものは、皆様も御存じの通り、鼠色の獸類
ですが、此象は、王様であるだけに、其小山の
様な大きな身體は雪の様に眞白で、寔に綺
麗で御座います。

さて、此白象王が、第一の寶物としてゐる
のは、先祖代々傳はる、黄金の冠で、この冠が
あればこそ、獸の王様となつてゐることが
出来るのです。

ある日の事、一頭の猿が、王様の御使ひで、
南の方の山中にゐる、家來の象の處へ参り、
其歸りがけブラ〜と、谷を傳つてやつて
参りますと、つい目の前の草叢から、ヒヨツ
コリ出たのは、一頭の狐です。

「オイ、オイ、猿さん。」

と呼ぶものですから、猿は、

「ヤア。だましの狐か、こんな處に隠れて
ゐて、おれ達を欺さうとするのかい。」
と行き過ぎやうとすると、狐は、

「なんの獸仲間をだましてなるものか。猿さん、お前、何處へ行つたのだ。」

「おれは、今日、白象王様のお使ひで、南の山へお使ひに行つたのだ。」

「左様かい。それは御苦勞だつた。それちやお前は、白象王のお使番とでもいふ役かい。」

「さうよ。年が年中、御使ひばかりだ。」

「つまらないナア。」

「つまら

なく

は

な

い

よ。

白

象王

様は、お



六
いらの様なものにまで、お情深くて、自分
一頭が、獸王だといふ様な顔附は、少しも
なさらんからナア。御奉公の仕甲斐が
あるといふものだ。」

「フム、だつて、人間でも、獸類でも、何でも出
世が肝心だよ。そこで如何だい。お前
は一番、獸の王様になる氣は無いかい。」
「エ、何だつて、獸の王様に……、ハツ、ハツ、
いくら、おいらの様な猿智恵でも、そんな

馬鹿な考へは起さないよ。」

「それが馬鹿だといふんだよ。お前の先
祖は誰あらう、孫悟空といつて、神通力を
得た猿の大王、しまひには、佛様になつた
といふえらいお方だ。今、お前が王様に
成るといふのに、不思議はない。成らう
と思へば、すぐと成れるぢやないか。」

「如何して、如何して。」

「お前の仕へてゐる、白象王の代々傳はる

あの黄金の

冠かんざりを

ソツ

と盗ぬす

み出しさへ

すればいゝ

ぢやないか。

そしたら、お

いらは勿論もちろん、



虎とらでも獅子ししで

も、馬うまで

も、牛うしで

も、大だい王わう

様さまと崇あがめるよ。』

『さうかい。それも

左さ様うだナ。それぢや盗ぬすみ

出ださうかナ。』

『盗ぬすみたまへ、盗ぬすみたまへ。』



と、無暗と狐に咬かされて、猿はふと其氣に成り、

「よし、これから盗んで來やう。」

「早くしたまへ、おいらは、これから、此上の、

ほら、あの山の絶頂で、待つてゐるから、盗

んだら、すぐと持つてきたまへ。」

「よし、よし、承知々々。」

と猿はそのまゝ、飛ぶが如く、白象王の處へ

歸つて参りました。

(三)

白象王は、今、酒宴の最中、其前には、彼の猿
がお使ひの口上を云つて了ふと、白象王は、

「御苦勞ぢやつた。少し休息するがよい。」

「ハイ、有難う御座います。さて大王様、向

ふに飾つてあるあの冠は、大變に綺麗な

もので御座いますねえ。」

「ホ、ウ。あれは先祖から傳はる黄金の

冠かんむりで、獸けものの王わうは持もたねばならぬものぢや。
 「左さ様さうで御座ございますか……大王だいおう様さま御酒ごしゆは
 モツと如何いかで。」

『イヤ、もう澤山たくさんぢや。

何事なにごとも、あまり過すこさぬ

が能よいぢや。どりや

奥殿おくでんへ行ゆかう。」

「お伴ともいたします。」

と、これから、王様わうさまのあとに

ついて、猿さるは奥殿おくでんへ王様わうさまをおく

つて行き、ソツとも

との處ところへ歸かつて參まゐ

り、

「ヤア、綺

麗れいだぞ、

綺麗きれいだ

ぞ。」

と、前後ぜんごを



黄金の冠

見廻し、かの黄金の冠を、チヤツと頭へ被る
が早い、か、ドン／＼ 駆け出して、狐と約束を
したお山の上へやつて来ました。

狐はチヤンと待つて居て、

「ヤア。 晚いぞ、晚いぞ。 猿さん。 ヨー、愈

黄金の冠を奪つて来たナ。」

「旨く行つたよ。 さあ、狐、今日からおいら

は獸王だぞ。」

「無論だ。 綺麗だな。 一寸、おいらに被ら

しては呉れまいか。」

「險呑だナ。 お前に被らすのは。」

「チーニ、お前の眼の前で、一寸被りさへす

れば、それで、おいらは氣がすむのだ。 一

寸で可い、一寸で可い。」

「さうかい。 それちや、一寸だよ。」

と冠を、狐に渡すと、受取つて、ヒヨイと被つ

て、

「コン／＼／＼。 コンな綺麗な冠が、天に

も地にもあるものか。立派だナ。立派
 だナ。オイ、猿ッ。」
 猿は眼を見張つて、
 「何だ。猿だつて、獸の王たるおれに向つ
 て、猿とは何だ。」
 「猿に違ひはないぢやないか。この冠を
 被つたからには、おいらが獸の王様だ。」
 「何でも可い。早く返してくれ。」
 「返すものかい。」

「エッ。」
 「虎王、
 御座
 れ。」
 と狐が
 叫ぶと、
 「ウオー。」
 と唸つて出て来たのは、
 一頭の大虎です。



「ヤア。それちやお前達は、おいらを欺したのか。」

と、呆れかへる猿を睨んだ大虎は、

「知れた事だ。もう貴様に用は無いの

だ。」

「残念だ。」

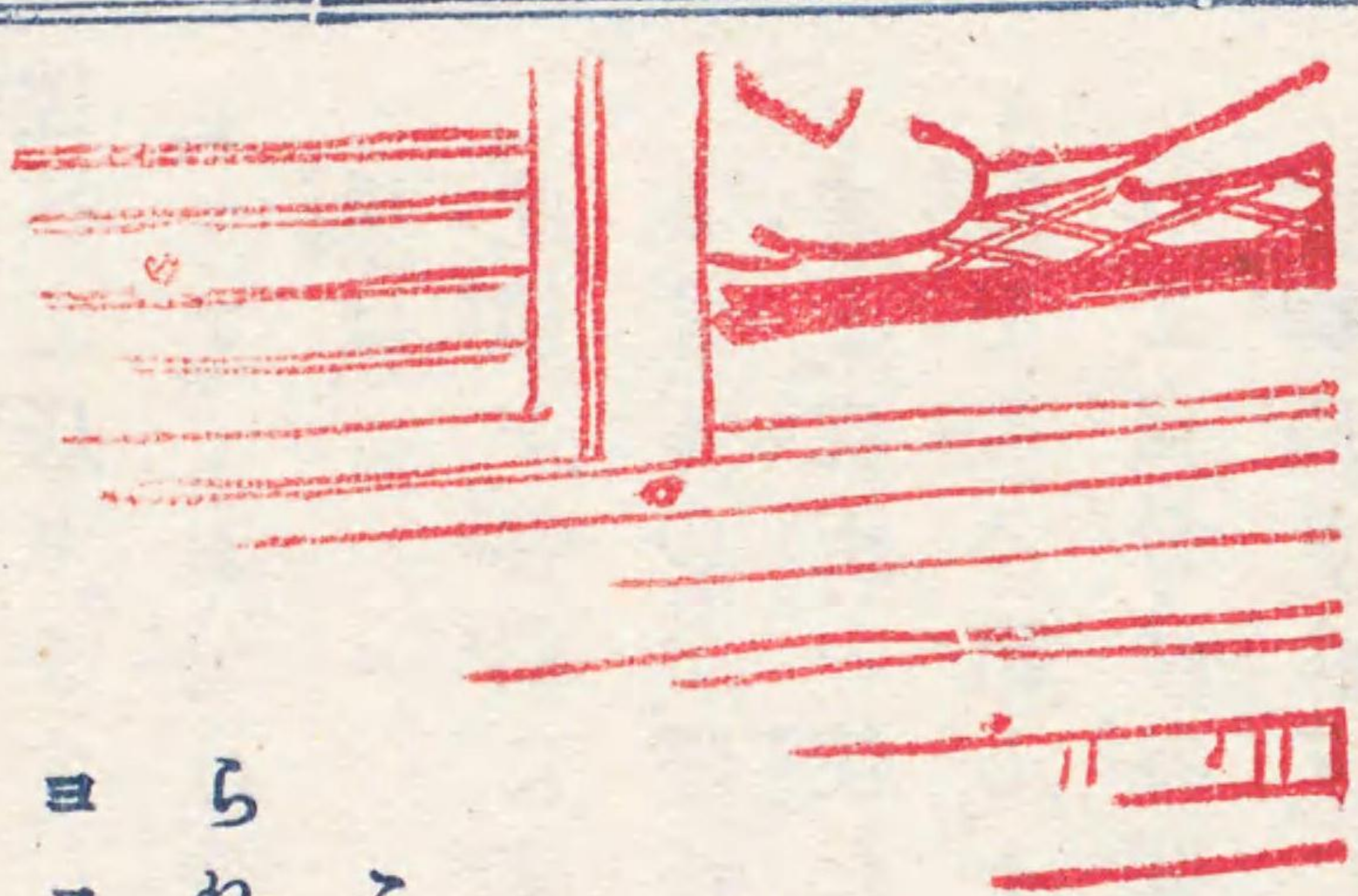
と飛びかゝらうとする猿の腰を、虎は前足でドンと蹴つたから溜らない。流石木攀りの上手な猿も、ころくころくと二三間、轉

んだはづみに深い深い、谷底さして落ちこんで了ひました。

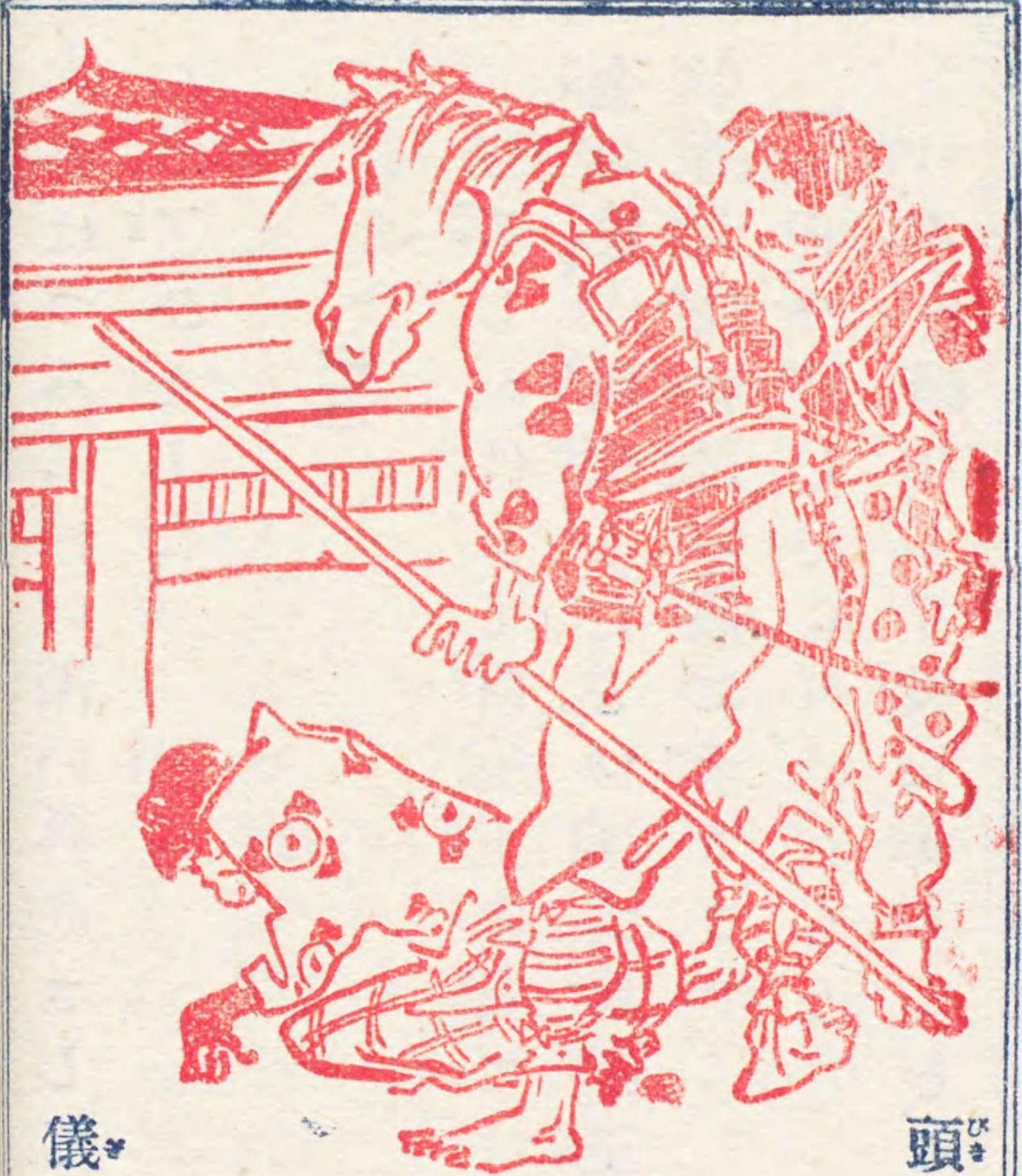
三

お話しかはりて、白象王の處では、寶物黄金の冠が紛失したといふ大騒動、王様初め牛馬犬猫鹿鼠の類に至るまで、

「さて、如何したら可いだらう。」
と、皆々會議をして居りますると、こゝへ一



した。白象王は、
「オ、兎、何ぢや。」
「御寶、黄金の冠を盗んだものを召し連れま
した。」
「左様か。」
こゝへ牛と馬とに引つば
られて、かの猿は、ヒヨコリヒ
ヨコリと参り、小さくなつて



頭の兎が、
ビヨイ、
ビヨイ
「御注
進御注
と、御辭
儀をしま

れ。また、おれは虎と戦争をする心はない。

そこに居つた、多くの獣、これはと呆れて、口を揃へ、

「な、何故、大王様には……虎の威勢に、お恐れなされて……」

大王は、莞爾と笑つて、

「イヤ、虎をおそれはせぬが、あの冠を被つたからとて、たゞ名ばかりの獣の王、それ

だけ身體に價値がなくなれば、何の役にもた

たぬわい。わしは、今日から、獸王でなく

たゞの象でも何でもかまはぬ。皆の者

と一處に、野を耕し、山を拓き、それらの

勤めをして、實の力を養ひおかば、何、名前

は、何でもかまはぬのぢや。」

と仰せを承はりて、獸の面々、成程、王様は王

様だけ、違つたものと感心をして、いづれも、

たとひ黄金の冠はなくとも、獸王様として

忠義を勵むことを盟ひました。

(四)

さてまた、こなたの虎王は、今日までも欲しい欲しいと思つてゐた、黄金の冠を奪つたものですから、さあ、急に威張り出しました。

「ヤイ、ヤイ。 獸王様の御殿が、こんな窟では仕方がないよ。 さあ、黄金白銀で、御殿

を建てる、狐猿共、牛馬共、何處かで、金銀を澤山奪つて來い。」

と、いはれて皆々是非がなく、手別をして、黄金白銀を探しに行きました。處がさうさう金銀などは、途に轉がつてゐるものではないありません。一頭のノツソリ牛は、野中を一頭で歩きながら、

「ヤレ、ヤレ、金や銀やが、こんな野中に轉がつてゐるものではない、困つたものだナ。」

といつて、つツ立つてゐると、向ふに、澤山な
獸類が、せつせと何か働いて居ります。

「オ、おいらの仲間があるナ、聞いて見や
う。」

と傍へ行つて、

「モシ、モシ、この邊に金銀の出る山か野は
ありませんか。」

と、随分馬鹿な問ひ様をしましたが、問はれ
た獸共は笑ひもせず。中にも犬は、

「ハイ、ハイ、金

銀は、野にも
山にも、随分
澤山出ます

よ。」

とい
ふか
ら、牛
は、



「へ、エ。此邊の野にも出ますかナ。」

「エ、エ、出ますよ。今私どもは其黄金の方を採つてゐるので御座います。」

「さうですか。何處に。」

と牛は、犬の前を見ると、砂をふるつて、其中から、少しづつ、落ちる金の砂が、キラ／＼と美しく輝きます。

「成程、綺麗だナ。此砂の中にあるのですか。」

「ハイ、ハイ、かうやつて仲間の者が、一處になつて、毎日々々、勉強してやりますと、金も銀も澤山採れますよ。」

牛は、涎をながして、感心をして、

「成程ナ。一處になつて働かんけりや、物は出来上らないナ。たゞ一頭づつ、手別して、ブラリ／＼と探したつて、駄目なこつてすナ。」

と、そのまま、虎王の處へ歸つて來ました。

(五)

牛がノソ
 リとかへつ
 て来ると、仲
 間の者も歸つて來
 て居りました、口々に、
 「どうも、少しも得物が
 無いの。」



「金や銀は何處にあるのかな。」
 「随分、無理な王様だ。」
 「黄金の冠があるだけで、や
 つぱり無惨な虎王だナ。」
 といつて居る處へ、
 「如何ちやつた。澤山金銀
 があつたらうナ。」
 と云つて出て來たのは黄金
 の冠ピカ／＼と、牙をむいた、



おそろしい虎王です。皆々は、

「へい。あの黄金は。」

「白銀は。」

虎王は、

「あつたのか。」

「ちつとも、御座いません。」

「何だ。ちつとも無い。澤山の獸が、手別

をして、少しも無いとは、働きの無い馬鹿

揃ひだ。おれは獸王だぞ、獸王の御殿が

金銀で出来なけりや、貴様等の罪だぞ。」
といふなり、一頭の馬を、頭からガリ、と嚙
んで、

「エ、。」

と振り飛ばしました。

いづれも驚いたが、たゞもう此虎王には

愛想をつかしました。虎王は、大怒りて、這

入つて了ひました。其あとで、皆々は相談

することには、

「聞けば、白象王は、大した慈悲深い御方と
か、虎王は、たゞ白象王の冠を盗んだだけ
て、獸王となつてゐるのだ。 どうだい。
皆々一處になつて、白象王の處へ御奉公
に行かうぢやないか。」

「それがよからう。」
といづれも大賛成、こゝで、盡く揃つて、白象
王の處へ參つて御奉公を願ひ出しました。
白象王は、これを聞いて、

「成程、道理ぢや。 ま、何事も、
人間は萬事遜つて、
そして日々の務
めをしてゐれば
能い。 黄金の冠
は、人間の手に出
来るものぢや。 怠けるもの
は、一生ダメぢやぞ。」
と、こゝで、白象王は、皆々を家來とし、日々、自



分も一處になつて、種々働いて居ります。
 虎王は、一頭の家來もなくなり、いくら黄
 金の冠を被つて居ても、威張つて見せるも
 のもなければ、賞めてくれるものもなし、日
 日ごろりと寐てゐては、まさか、黄金の冠の
 中から食べるものが飛び出しもしないか
 ら、こゝで初めて、自分の悪い事を悟つて、と
 うく、白象王に降参をし、黄金の冠を返し
 ました。

ある日、白象王は、多くの家來を召しよせ
 て、黄金の冠を被つて、喜びの宴を開きまし
 た。威あつて猛からぬ白象王が、黄金の冠
 を被つた處は、實に氣高い姿で、多くの獸は
 たゞ平伏して了つて、其後千年萬年、獸の王
 には、此白象が成つたと申傳へます。

二(錢拾六金)二(册十全)二(嚙伽お色十人十)二

明治四十一年十二月十五日印刷
明治四十一年十二月二十日發行

編輯者兼
發行者

金港堂書籍株式會社
東京市日本橋區本町三丁目十七番地

不許
複製

代表者社長

原亮三郎

印刷者

手塚猛昌
東京市京橋區繪屋町十五番地

發賣所

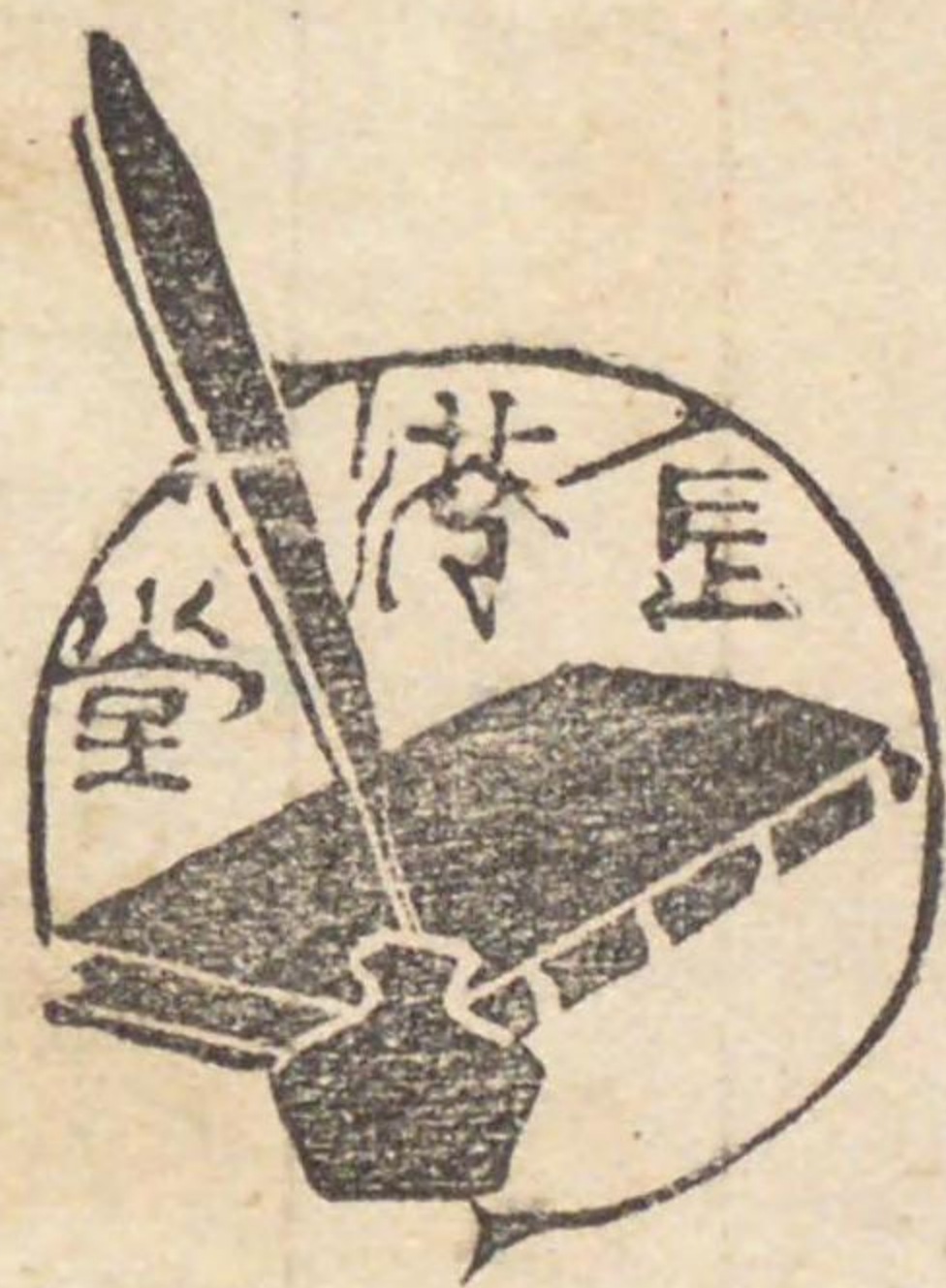
東京日本橋區
本町三丁目

金港堂書籍株式會社
振替貯金口座 八八一五番

(刷印社會式株刷印洋東)



110



(星堂)